

6. 地の果てロカ岬

シントラの鉄道駅まで戻り、改めてロカ岬行きのバスに乗り換える。狭いそれもカーブの多い道を恐ろしく飛ばす運転手で、家内が乗り物酔いになってしまった程である。まず、バスを降りたところに立っている、シントラ市役所の出張所によって、ユーラシア最西端に立ったことの証明書を作ってもらおう。日本円で約2,000円もするせいか、あまり頼む人はいないようだ。

ともあれ、証明書を受け取ってから最西端のロカ岬に立つ。岬の先端にシントラ市議会が建てたモニュメントがあり、そこにはポルトガルの詩人ルイス・デ・カモンエスの長編叙事詩「オス・ルジアードス」の一節「ここに地果て海始まる」という言葉が刻まれている。確かにここはユーラシア大陸の西の端である。ポルトガル人を除く全てのヨーロッパ人にとって、ここは陸と海を分ける最果ての地であろう。ただし、カモンエスには悪いが、わたしはここがポルトガル人それもルイス・デ・アルメイダたち16世紀の冒険者達にとっての世界の果てだとは思っていない。



ユーラシア大陸最西端のロカ岬、水蒸気に煙る水平線の向こうは、つい800年も前までは世界の果ての煮えたぎりながら流れ落ちる海があり、多くの船乗りたちが恐れ戦いていた。その世界が丸くエンドレスなものであることを人類が発見するのに最も貢献したのがポルトガルであり、その恩恵を世界で最初に得たのもこの国であった。

地中海が世界史の海の舞台だったころ、船乗りたちは、いや船乗りたちだけでなくヨー

ロップの人々にとって「世界には果て」があった。果てしない大西洋の水平線の西側のどこかに世界の終わるところがあり、海が轟々と煮えたぎりながら奈落に落ちている。21世紀の今日なら笑話でしかないことを、実は15世紀に大航海時代の幕開けを推進したエンリケ航海王子ですら半ば信じていたのだ。

彼が時の為政者として初めて水平線の向こうに何があるか興味を持ったことが、大航海時代の幕を開けさせたのだ。その彼でさえ、初めにアフリカ大陸への渡海を計画したのは残念ながら、ジブラルタル海峡から地中海に少し入ったところにあるセウタだった。この大航海時代の生みの親が、その後、航路開拓の拠点にしたのはサグレスという現代では寒村でしかない町であり、そこから見えるサン・ヴィセンテ岬こそがヨーロッパと未知の世界の境だった。現在でもそこがユーラシア最西南端と呼ばれている。残念ながら、今回のわたしの南蛮巡礼ではサン・ヴィセンテ岬には行けなかった。

岬はどこでもそうだが、ロカ岬も風が強かった。しかし、世界中のどこの風とも違って、大西洋の彼方から吹いてくる風は、不思議なことにわたしの体に浸み込み、突き抜けていく。日本では見たこともないような不思議な花たちが咲いているのも、異次元の世界に迷い込んだと錯覚させてくれる。観光バスが次から次にやって来るし、中には日本語を声高に（風が強くて聞こえないからだろうが）話す一団もいるというのに、わたしは何とも不思議な孤独感に見舞われていた。

水平線の辺りが煙るように霞んでいるため、本当にその先に世界の果てがありそうな雰囲気を感じている。500年の時空を超えてわたし自身がこれから未知の海原に漕ぎ出そうとしているかのような気持ちになっていた。

岬の突端に立つ最果ての塔には「ここに地が果て、海が始まる」と刻まれている。そこ



最果ての地から海上を照らす燈台は、最果てには似つかわしくないほど立派だった。ポルトガルの過去の栄光を一身に背負って、青空に突き刺さっていた。

から振り向くと、美しい燈台が青空に突き刺さるように立っているのが見える。日程に余裕さえあれば、ここで夜を過ごして、この最果ての燈台の放つ光を見てみたいところだ。



ヨーロッパ最西端に立ったことの証明書を岬のシントラ市出張所で交付してくれる。その場で係官の手書きのサインが重々しく記されて、旅情を彩ってくれる。

そうすれば、わたしはさらに異次元の時空

へと誘われるのだろう。その期待は、だが恐怖でもある。決して不愉快な恐怖ではないが、不愉快ではないというところが、かえって別の意味での怖さを秘めているのかもしれない。



カスカイスからベレンに戻る郊外電車の中は、バカンスに来ている人々で満席だった。ポルトガルでは電車も列車も背もたれが固定されていて動かないため、進行方向に向かっての座席の方向も固定されている。わたしもこのお嬢さん方も、座っている方向からすると後ろ向きに電車は走っている。

その怖さに追われるように、初めに入った市役所の出張所まで戻った。バスを待つ観光客が大勢いる。さっき乗ってきたバスと同じだとしたら、全員は乗れそうにもないがと心配になったが、待っている人々は屈託もない顔で大人しく待っている。



岬に立つ石碑のプレートにはポルトガルの詩人ルイス・カモンエスの「オス・ルジタニアス」という長編叙事詩の一節「ここに地が果て、海が始まる」という言葉が刻まれている。ルジタニアスとはポルトガルの旧名ルジタニアの人々という意味である。

ロカ岬からまた神風バスに乗って、今度は南下してカスカイスという海辺の保養地に出た。

そこからリスボンに戻る郊外電車にはドイツから日光浴に来ているらしい若い女性達のグループと乗り合わせた。肉付きのいいメツチェン達は自分の髪で背中がまだら日焼けにならないように長い紙を高々とかき上げて図上に大きな団子をこさえていた。彼女達はしかし、どうゆうわけか全員が夢中になって新聞を読んでいる。日本人の女の子達なら、おしゃべりに夢中なはずだが、彼女達はそれぞれが自分の世界に浸っていて、ずっとしゃべらずにいた。

電車はやがてベレン地区に差し掛かり、ジェロニモス修道院の偉大な体躯をかすめてい

く。この修道院はポルトガルに莫大な利益をもたらしてくれた、あのヴァスコ・ダ・ガマの廟所として建てられたという。建物の偉大さがそのままヴァスコ・ダ・ガマの功績の偉大さを物語っていた。明日はここまで来て、ヴァスコ・ダ・ガマのポルトガルにとっての偉大さに直に触れ、ついでにベレンの塔にも登ってテージョ川を陸から眺めてみたい。